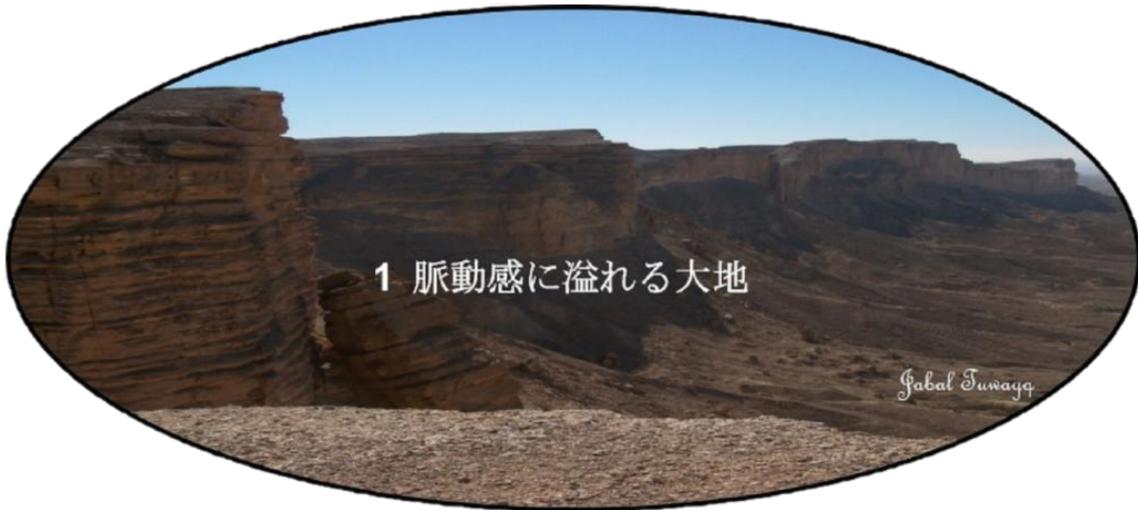


「アラビア半島を旅する」 高橋俊二

第1章 脈動感に溢れる大地



目次

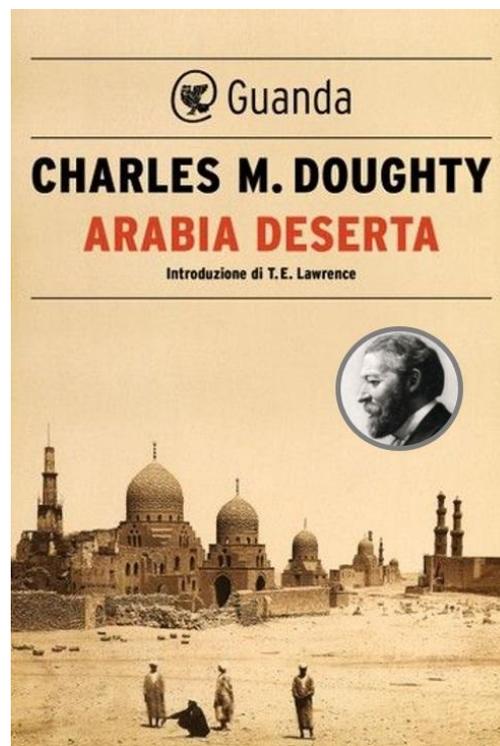
1. アラビア半島とは
2. ダウティの旅
3. 沙漠のオアシス
4. 「砂漠」ではなく「沙漠」
5. 風に運ばれる砂
6. 脈動感に溢れる大地

1. アラビア半島とは

古代アッシリア時代には交易に従事したり、多数の駱駝騎乗戦士で略奪したりするアラブ族が住む沙漠がメソポタミアの南に有る事は知られていました。それでも自然条件の厳しさから自らその土地を訪れたり、略奪部隊を奥深くまで追撃したりする事は、ありませんでした。（後述のチャールズ・モンタギュー・ダウティの記述）

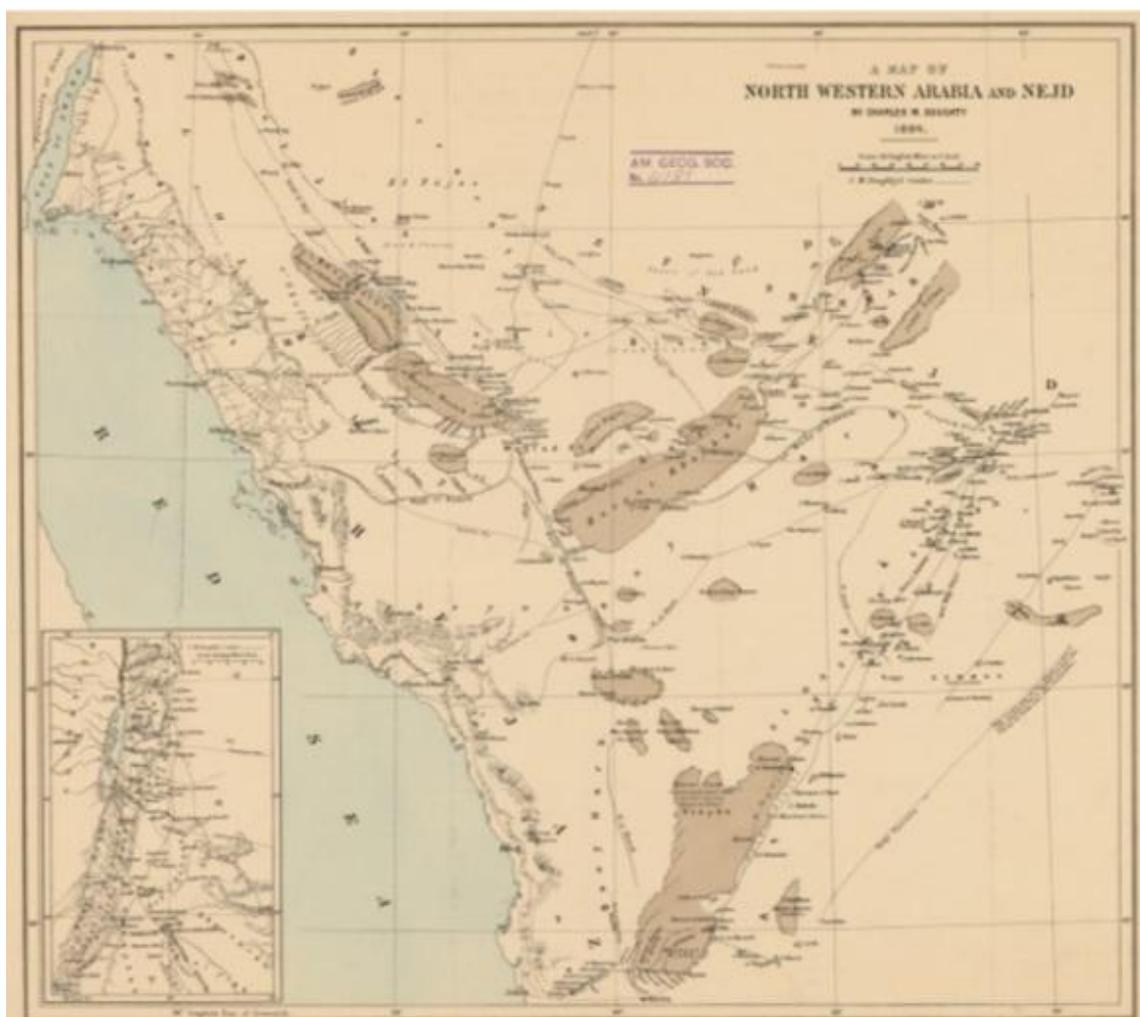
2. ダウティの旅

英国人文筆家で旅行家のチャールズ・モンタギュー・ダウティは、1876~1878年にローマ人が3つに分類したアラビアでも最も過酷な「アラビア沙漠」を敢えて旅行し、地理学、地質学そして人類原語学上の発見と観察の膨大な記録を「アラビア沙漠の旅」として1888年に出版しています。この著書は野心的旅行記の傑作であるばかりでは無く、ダウティ自身も西洋旅行家で最も傑出した人物の一人であるとの評価を次第に確立し、トーマス・エドワード・ロレンスが1920年に再版させた程です。



ダウティの旅は、後援も無く、「未知であったアラビアから遠ざかる方が良い」と云う周囲の賢明な忠告を無視した孤独な旅でした。ダウティは忠告を聞き入れなかった事に対してこの2年間の旅行中に「孤立した生命の存在も感じられず、ここに進入した熱の圧迫で死んだ土地になっている。もし死んでなければ自分の骨の絶え間ない疲労以外に家に持ち帰る物は無い。荒野は日で照らされた渇きの前にかすんでいた。...我々は炎を呼吸している様に見えた。私は呼吸が止まり、食べることも出来なかったので、終日あえぎながら、何とか生き延びていた」と述べています。

その様に激しい暑さ、窮乏、渇き、そして唯一の安全保証である部族への所属無しでの他国者として絶え間ない死の脅威を受ける物凄く辛い代償を払っています。「無一文のキリスト教徒であるダウティが或る地点から次の地点までの旅を猜疑心の強いイスラーム教徒の当てに成らない好意を頼りにして乞わなければ成らなかった」と云う現実がありました。その上、異教徒であるが故に虐待され、つばを吐きかけられ、打ちのめされ、殺されかけ、危うく難を逃れていました。



アラビア語はほとんど話せず、アラビアの知識も殆ど無かったダウティをこの旅に駆り立てた動機は、シナイ半島を訪れ、「おそらくは月以外では何処にも世の輪郭がこの様にむき出しに曝されている場所はない」と記述している事にあるのでは無いでしょうか。又、ペトラを訪れ、「この忘れられた町の神秘について記録する最初の間人になりたいとの強い衝動に駆られた」とも述べています。王立地理学協会からの援助も受けられず、ダマス

カス駐在の英国領事による冒険を思いとどませようとする試みを拒否して、ダウティはメッカに向かう隊商と共に南に向けて出発しました。



「アラビア沙漠の旅」

3. 沙漠のオアシス

私は、1980年代初めの中国赴任時代に小休暇で新疆・ウイグルから甘肅省へと河西走廊を一人旅しました。砂利が堆積したゴビ灘、吐魯番（トルファン）近郊の燃える火炎山、巨大な土丹が並び、一年中風の吹きすさぶ布隆吉（プーリュウジー）を通過して、敦煌莫高窟（バコウクツ）の近くで鳴砂山に登り、その麓の月牙泉をしばらく眺めていました。月の明るさのある泉の畔を二瘤ラクダの行列が過ぎゆく様子は、童謡から想像していた「月の沙漠」そのものでした。その月牙泉を観察していると、巨大な堆積が集水構造と成ってその下の基盤に水を貯え、基盤が地表に現れている場所が泉になる事が良く理解できます。



敦煌郊外にある月牙泉で背後は鳴沙山(Crescent Lake in Dunhuang) (Wikipedia)

これはアラビア半島でも全く同じで、泉になっていなくても砂丘と砂丘の間の砂地を掘って水井戸としている場所があります。そのような場所が多いことが、沙漠トレックしているとよく分かります。



ナフード・スワイラートの砂丘の麓に湧き出る地下水の池（撮影：高橋）

A pond of groundwater that springs up at the foot of the dunes of the Nafudal-Thuwayrat

4, 「砂漠」ではなく「沙漠」

平らな土漠や砂利原では映像として好まれず、砂丘地帯が沙漠の代表として映されるので「砂漠」が余り抵抗なく使われていますが、原語に戻れば文字通り、水の少ない場所が沙漠であり、山地や涸れ谷なども含む広大な地域です。沙漠に当用漢字では「砂漠」と云う漢字を当てていますが、「砂漠」という漢字は水のある場所との印象が強いので筆者は漠々と水の少ない地域を示すのに「砂漠」ではなく、敢えて「沙漠」を使っています。水の少ない場所では基本的に草木は疎らであり、腐敗菌も余り居ないので土は作られません。例え作られたとしても乾燥している為に砂塵と成って風に吹き飛ばされるので砂丘地帯を除けば、グランドカバーと云われる表層は無くダウティが述べている「月世界の様な景観」との表現も相応しいかも知れません。



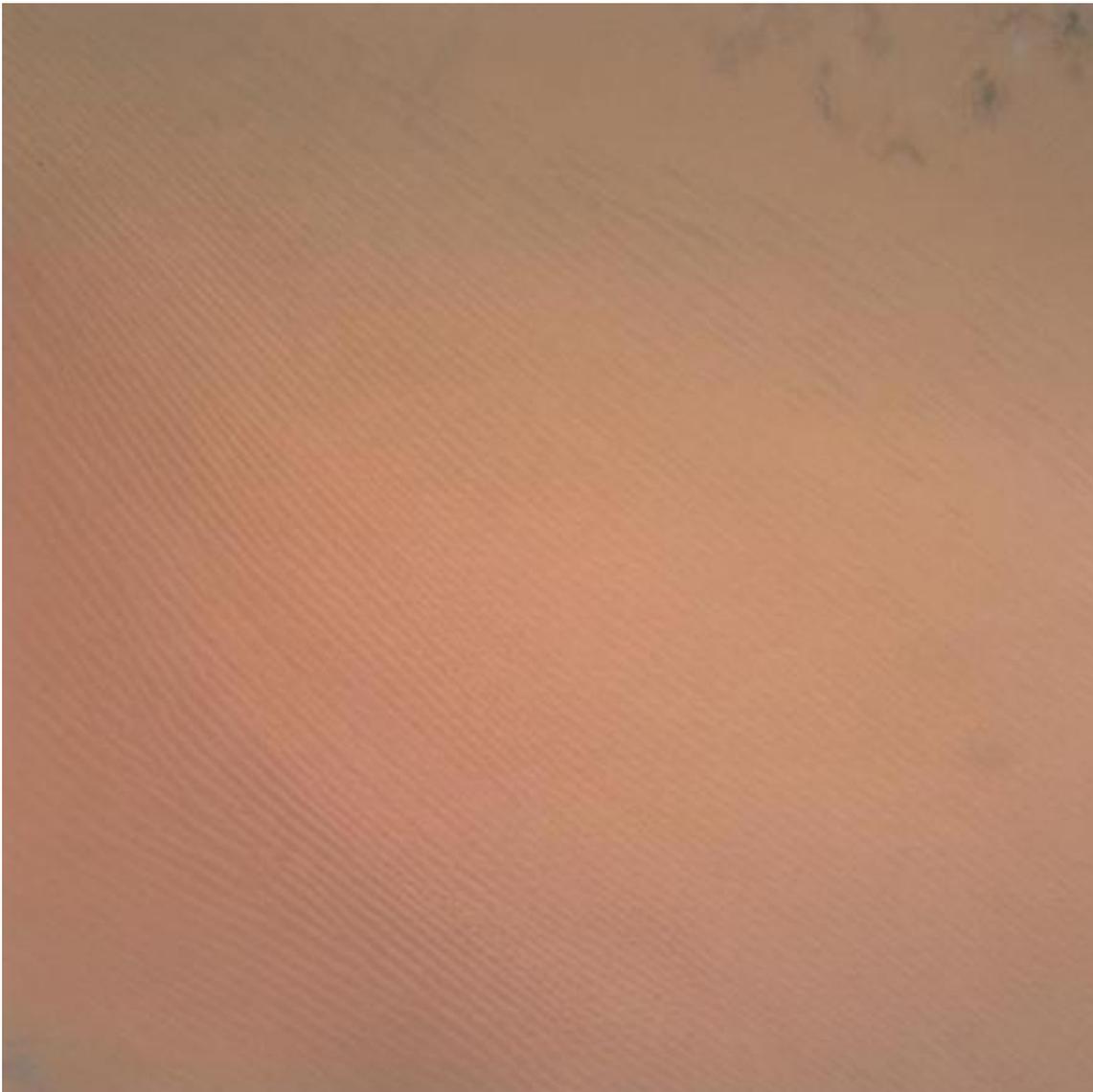
リヤード付近のトゥワイク山脈の山稜「世界の果てから西方の沙漠を臨む」（撮影：高橋）



トゥワイク山脈の山稜「第3 キャメル・パス」から西方の沙漠を臨む（撮影高橋）

5. 風に運ばれる砂

小さな砂粒の集まりが風に運ばれます。風も殆ど無くてもその砂地に座ると、砂が音も立てずにさらさらと静寂の中で地形も変えずにひたすら地表を移動していることが分かります。そして砂は風に押されて、数百メートルの崖を這い登り、北のナフード沙漠から南のルブア・ハーリー沙漠まで 1,000 キロに及ぶ砂の河（ダフナー沙漠）が果てしなく流れ続けています。



空白地帯に並ぶ巨大砂丘列の航空写真

(The aerial view of the huge dunes lined up in the Rub' Al Khali) (Nasa Visible Earth)

6. 脈動感に溢れる大地

踏んでいる大地は「変化しない世界」として受け止められがちですが、十分に長い期間を展望すれば、この大地は非常に変化に富んでいます。大陸は地球上を活発に揺れ動き、相互にぶつかり、海洋は広くなったり狭くなったりを繰り返す、陸地は隆起したり沈下した

りしてきました。同じ場所が過去の時代には氷河であったり、熱帯雨林であったり、珊瑚礁であったり、乾いた沙漠であったりもします。

地勢の成り立ち、沙漠の地表に産出する化石や人の営み等発掘しなくとも沙漠では直視できますし、手で直接触ることもできます。苛酷な自然条件が幸いして人の立ち入りを阻害していたので多くが完全な形で残されてもいます。沙漠を旅（トレック）しながらその変化する地勢、地質や遺物を対比し、太古から現在に至るその成り立ちに思いを馳せながら太古の水の浸食やこの数千年の風食によって作られた地勢の形成過程、異なる地質や人の営みを考えながら時間を短縮すると、単調に思えた沙漠が興奮する程の脈動感に溢れる大地と成り、浪漫を秘めた世界が広がります。

1 脈動感に溢れる大地 – Desert peninsula

<https://shvnjit.com/%e3%82%a2%e3%83%a9%e3%83%93%e3%82%a2%e5%8d%8a%e5%b3%b6%e3%81%a8%e3%81%af/%e7%ac%ac1%e9%83%a8-%e5%a4%a7%e5%9c%b0%e3%81%ae%e8%84%88%e5%8b%95%e3%82%92%e6%97%85%e3%81%99%e3%82%8b/1-%e8%84%88%e5%8b%95%e6%84%9f%e3%81%ab%e6%ba%a2%e3%82%8c%e3%82%8b%e5%a4%a7%e5%9c%b0/>